

2022年近畿アグリハイテク・公開セミナー 「私たちは有機農業をどう育てていくのか」

# 有機農業の教育力と コミュニティ再生、環境再生潜在力

恵泉女学園大学人間社会学部教授・教育農場長

やまなし有機農業連絡会議代表 フルーツグローア一澤登共同代表

澤登早苗

# 「私たちは有機農業をどう育てていくのか」

- 私たちは、今なぜ有機農業を育てる必要があるのか？
- 私はなぜ、有機農業の実践を続けてきたのか？
- 有機農業を実践する中で教えられたこと、感じていること
- 私たちは何故、有機果樹生産を継承しているのか？
- 私たちは、これからどこに向かっていくべきか。



# バックグラウンド

専門：農学（園芸学、有機農業学、食農教育論）

山梨県生まれ・山梨県在住

- ・大学教員兼有機果樹農家（ぶどう・キウイフルーツ）
- ・多摩市農業委員（2期目）
- ・日本有機農業学会理事・元会長
- ・やまなし有機農業連絡会議代表 等
- ・フルーツグローアー 澤登 共同代表
- ・恵泉女学園大学人間社会学部教授 教育農場長





# 1. はじめに

- ・大きく変化する日本の食料、農業、農村を取り巻く情勢
- ・食、農、環境に関わる法律の制定と食農・環境プログラム
- ・エシカル消費という新しい概念

# 1.1 大きく変化する日本の食料、農業、農村を取り巻く状況

- 農業をめぐる状況が目まぐるしく変化
- 農村の人手不足、技能実習生問題など
- COVID-19の感染拡大で見えてきたこと
- ロシアによるウクライナへの軍事侵攻で見えてきたこと
- 世界農業遺産の創設と、先進国への拡大

## 1.2 食、農、環境に関わる法律の制定と食農・環境プログラム

- ① 2005年～:「持続発展教育(ESD)のための10年」
- ② 2005年 :「食育基本法」成立(2021年～第4次)
  - ・教育ファームの推進(「食」と「農業」)
  - ・学校給食での地元食材の利用促進 若者の食育
- ③ 2006年 :「有機農業推進法」成立・施行 (「食」「農業」「環境」「教育」)
- ④ 2008年 :「学校給食法」改正、「食」と「教育」
- ⑤ 2008年 :「生物多様性基本法」成立・施行
- ⑥ 総合的学習(2002年～)、技術科等における栽培教育の奨励
- ⑦ 2014年 :「アレルギー疾患対策基本法」成立(2015年施行)
- ⑧ 2015年 :持続可能な開発目標(SDG's)
- ⑨ 2021年 :「みどりの食料システム戦略」策定 2022年「みどり新法」施行
- ⑩ 2022年 :「環境物品等の調達の推進に関する基本方針」(グリーン購入法)見直し  
(有機農産物の利用奨励)

⇒ 「有機農業」が重要な役割を担う時代へ

## 1.3 エシカル消費という新しい概念

- 2017年 取り組みスタート
- 「地域の活性化や雇用なども含む、人や社会、環境に配慮した消費行動」





## **2. 有機農業の魅力**

**－有機農業の教育力と可能性－**

## 2-1 特別な存在となった農業や農村

- 「生産者」と「消費者」との距離
- 「農業についての教育」・「農業による教育」
  - ⇒ 産業を支えるための専門教育
- 江戸時代：
  - 農民 家業の訓練、農業の教育を受ける中で自己形成
  - 武士 たしなみの一つと位置付け？（足利学校「菜園場」）
- 明治以降：近代教育政策のなかで、農業教育は人格形成の根本にかかわる一般教養として認められなくなり、一職業の技術教育として位置づけられるようになった

## 2-2 どんな農業が教育力を発揮するのか

- 農業の近代化による農業と農村の変容:
- 近代化農業の主目的: 作物の生産効率の向上
  - ⇒ ①耕地生態系の単純化
  - ②共生ではなく排除
  - ③生産環境以外の環境は視野にない
- 「産業としての農業」:
- 「農の営み」「いのちを育む」というメッセージは伝わりにくい

## 2-3 近代化農業に教育力はあるのか

- 「農村は自然があるだけで教育価値をもちうるわけではない。そこに住む人々の生活意識、生活行動がひとつの教育環境をつくりその価値を生み出すものだ」

陣内義人(1990)「農業の教育力」

- 「農業の行われているところには必ず農業的思考があるわけではないし、農業が子どもにとって知性を磨くといっても農業ならなんでもよいわけではない」

渋谷・岩浅ら(1986年)「教育にとって自然とは」



## 2-4 教育力を発揮する有機農業

- 有機農業がめざしているもの
  - ①共生 : 多種多様な生き物、多様な価値を認める。
  - ②循環 : いのちのつながりと物資の循環を大切にする。
  - ③生物多様性 : 生物相豊かな耕地生態系をつくり、維持していく。
- (澤登(2005)「教育農場の四季」)

# (1)「農」、「食」、「環境」をつなげる有機農業実践の履歴

- ① 恵泉女学園大学(1994年～)
  - ② 子育てひろば「あい・ぽーと」(2003年～)
  - ③ 多摩ニュータウン落合商店街(2006～2008年)
  - ④ 多摩市永山公民館市民大学講座(2009年度)
  - ⑤ 多摩ニュータウンにおける都市型農園を用いた高齢者の「生きがい・就労」社会実験(2011～2012年度)
  - ⑥ 恵泉女学園大学 公開講座「有機園芸実践講座」(2012年～)
  - ⑦ 「福島キッズ・リフレッシュキャンプ」開催 (2013年～2019年 6回開催)
  - ⑧ 恵泉CSA (教育農場を核としたコミュニティ形成を目指して)(2016年～)
  - ⑨ 笛川中学校大豆プロジェクト(2017年～)
  - ⑩ 里地里山小麦プロジェクト(2018年～)
  - ⑪ 韓国 梨花女子大「わかちあいのリーダーシップ」プロジェクト(2019年～)
  - ⑫ 多摩ニュータウン豊ヶ丘・貝取商店街 New Town Farmers、(2020年～)
- その他:港区立 白金台幼稚園(2007年～2008年)、渋谷区立 中幡小学校、町田市市内小学校
- 「子ども食堂・誰でも畑」(多摩市内、2017年～2019年)

大学キャンパス

恵泉女学園  
大学教育農場

- 教養教育としての生活園芸：全学必修（人文学部・人間社会学部）
- 食と農と環境をつなげる有機農業の実践：1994年～
- 2001年教育機関初の有機JAS認証取得
- 「循環」「共生」「多様性」を基本とする有機栽培で1年間野菜と花を栽培
- 畑を耕し、作物を育て、収穫して食べる体験を通して、生きるための食、それを生み出す農（業）と環境を身近なものとして捉え、そこに関わる様々な問題について学ぶ

多摩ニュータウンと多摩丘陵（2010年4月撮影）

町田市小野路  
里地・里山プロジェクト  
実践地



# (1) 恵泉女学園大学の「生活園芸 I」の概要

- ・1年次必修科目「生活園芸 I (春)」「同(秋)」(4月～1月)
  - ・週に1コマ90分(20～30分ミニ講義＋実習)  
雨天時は室内で講義、通常授業の枠組み内
  - ・1クラス 40～50名前後、指導:教員1名＋補助2名
  - ・個人長靴貸出(以前は麦わら帽子・ベルトポシェットも)
  - ・有機JAS認証農場
  - ・2人1組で管理する畑(0.9㎡X3、0.45㎡X1)＋クラス共同の畑
- 作目(年間12品目)ジャガイモ、キュウリ、サツマイモ、ムギワラギク、ハクサイ、ダイコン、コカブ、チンゲンサイ、サニーレタス、ラディッシュ、ホウレンソウ、サトイモ、ショウガ

2人一組で区画を管理



4月最初の授業で  
ジャガイモを植え付け



## (2) 必修科目「生活園芸Ⅰ」が学生にもたらしているもの

- ① **持続可能教育 (ESD):**  
持続可能な社会を担う市民育成のための基礎教育  
(第3者評価(2010))
- ② 食育・食農教育「種子から育てて食べること」から学んでいること
- ③ 有機農業でなければ学べないこと
- ④ 「食と農と環境に関する意識調査(2008年～)」から見えてきたこと

## ① 生活園芸の教育力(第3者評価)

- ◆「教養教育としての生活園芸」が学生に与えた影響  
(丹下晴美(2010)「教養教育としての生活園芸最終年度における外部評価報告書」より)
- ①収穫物を介した家族関係・人間関係の再構築⇒自己肯定感を培う
- ②「食」「いのち」「子育て」への関心の喚起
- ③共同作業による社会性の向上
- ④豊かな人間性の涵養
- ◆「生活園芸」=「有機園芸を基盤とした教養教育」の使命
- ・ 持続可能な社会を担う市民育成のための基礎教育
- ・ = 持続可能教育(ESD)

## ② 種子から育てて、食べることから学んでいること(食育・食農教育)

### ◆ 「生活園芸Ⅰを通じて得たもの」(秋学期末レポートより抜粋)

- 「幼いころからの野菜嫌い。しかし、自分で育てたきゅうりはとてもおいしく食べられた。」
- 「野菜を育てたことで母になったような気持ちに」
- 「いただきます」の意味が分かり、食べものを大切に食べたいと思うようになった。
- 食べものを粗末にしないようになった。作ってくれる人のことを考えるようになった。

(2013年度)

- 食べ物に対する意識が変わり、今私が食べている野菜も肉もご飯も全て、農家の方が心をこめて育ててくれたからあるものなんだ、当たり前ではないんだと感謝するようになりました。

(2020年度)

- ⇒ 「**食べ物を大切に作る心**」「**作ってくれる生産者への想い**」

## ◆ 「食べることは全ての人に共通」(共食)

野菜を育てることを通じて育まれる、

人と人との関係、コミュニケーション力、共感する心

- 「おじいちゃんやおばあちゃんと共通の話題ができた」
- 「国が違っていても食べることは共通」
- 「私が育てた野菜を家族が喜んで食べてくれた」
- 「野菜を育てるとやさしい気持ちになれる」
- 「農家の気持ちが分かるようになった」



アフリカからのJICA研修生とともに



③ 有機農業でなければ学べないこと

**恵泉の有機農業の基本的な考え方：  
「循環」「共生」「多様性」**

# 「循環」 ～地域資源の有効活用～

## 地元八王子産「牛糞堆肥」



## 地元造園業の刈草



作物栽培の基本は土づくり、良質の堆肥を入手し、身近にある有機物を活用する

認 証



産物

園大学  
1-043

特定非営利活動法人  
有機農業推進協会



# 「循環」～落ち葉堆肥・腐葉土作り～



身の回りには有効な資源が一杯：キャンパスの落ち葉、農道の落ち葉、雑草(刈草)、野菜くず、など等を活用「捨てればごみ、生かせば資源」



# 「循環」～お礼肥え～ 来年の学生のために



年に一度は、焼成有機石灰(焼貝殻)でミネラル補給  
土が痩せているときは、米糠、牛糞堆肥も一緒に





# 生活園芸の授業から得たもの(2020年度秋学期レポートから抜粋)

- 様々な生物に触れ、多様な生き物がいて千差万別なのだということを感じ、以前より世界を広く見ることができるようになりました。
- 生きて行く上で、大切なことがいくつも学ぶことができました。..
- 野菜がどのように出来ているのかを知るきっかけになることで、今まで持っていた”農業”というイメージが変化しました。
- 今まで農業の否定的な側面ばかりに目を向けていたが、自身で作業をしてみても初めてその良さを体感することにつながった。
- たくさんの若い世代の人たちに実際に体験してもらい、私がそうであったように農業や園芸の良さに少しでも気づいてもらうことが、最も良い解決方法
- 虫が非常に苦手なこともあり始めはとてつと土を耕すことなどに抵抗感を抱いたことがとても印象に残っている。その抵抗感は徐々に畑に接する機会が増えるに連れて自然に消えていて自分自身でも不思議に感じられた。



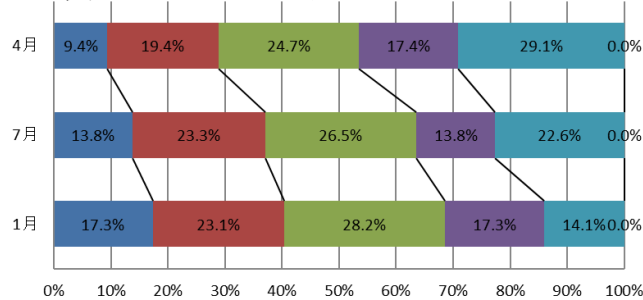
## ④ 恵泉女学園大学年生を対象とした 食と農と環境に関する意識の1識調査(2008年～)

- 生活園芸 I の実習開始時(4月)、春学期終了時(7月)、秋学期終了に約50項目からなるアンケートを履修生全員を対象に実施
- 生活園芸の実習前後での意識に変化が生じているか否かを分析
- 入学時の学生の意識に関する年度間差については未分析
- 傾向: 年々、野菜嫌いの学生が増加
- 実習後 ⇒ 自分で育てたものなら食べられた
- これまで食べていた野菜と味が違った などの感想



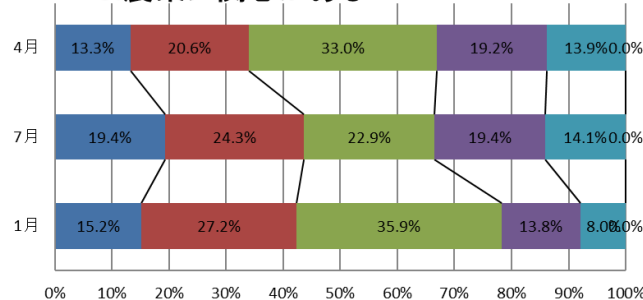
# 考察:最初から土、農業、環境、野菜に関心が高いわけではない。 食習慣に大きな変化は見られない

### 3. 良い土か悪い土か気になる



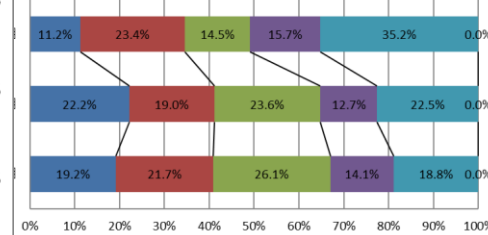
	1月	7月	4月
■ そう思う	17.3%	13.8%	9.4%
■ どちらかと言うとそう思う	23.1%	23.3%	19.4%
■ どちらとも言えない	28.2%	26.5%	24.7%
■ どちらかと言うとそう思わない	17.3%	13.8%	17.4%
■ そう思わない	14.1%	22.6%	29.1%
■ 誤記入・未記入	0.0%	0.0%	0.0%

### 5. 農業に関心がある



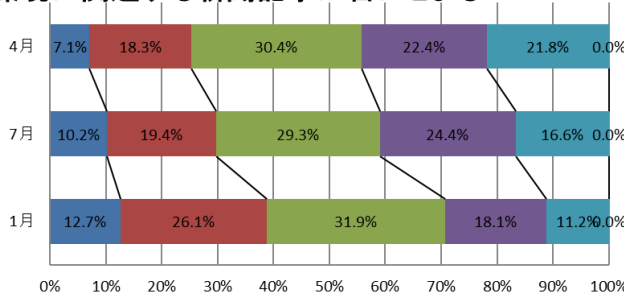
	1月	7月	4月
■ そう思う	15.2%	19.4%	13.3%
■ どちらかと言うとそう思う	27.2%	24.3%	20.6%
■ どちらとも言えない	35.9%	22.9%	33.0%
■ どちらかと言うとそう思わない	13.8%	19.4%	19.2%
■ そう思わない	8.0%	14.1%	13.9%
■ 誤記入・未記入	0.0%	0.0%	0.0%

### 7. エコバッグを持ち歩いている



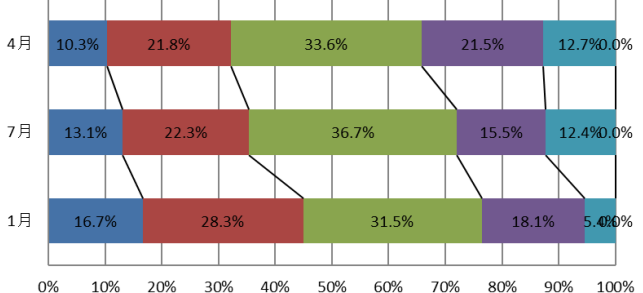
	1月	7月	4月
■ そう思う	19.2%	22.2%	11.2%
■ どちらかと言うとそう思う	21.7%	19.0%	23.4%
■ どちらとも言えない	26.1%	23.6%	14.5%
■ どちらかと言うとそう思わない	14.1%	12.7%	15.7%
■ そう思わない	18.8%	22.5%	35.2%
■ 誤記入・未記入	0.0%	0.0%	0.0%

### 9. 環境に関連する新聞記事が目にとまる



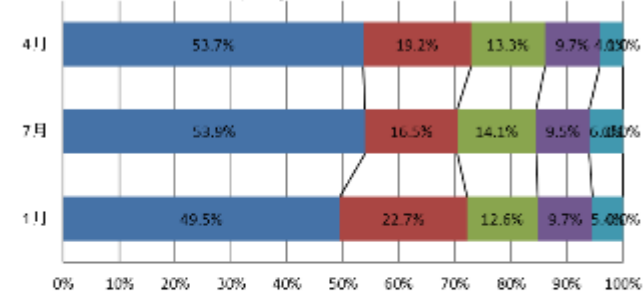
	1月	7月	4月
■ そう思う	12.7%	10.2%	7.1%
■ どちらかと言うとそう思う	26.1%	19.4%	18.3%
■ どちらとも言えない	31.9%	29.3%	30.4%
■ どちらかと言うとそう思わない	18.1%	24.4%	22.4%
■ そう思わない	11.2%	16.6%	21.8%
■ 誤記入・未記入	0.0%	0.0%	0.0%

### 15. どのように作られた野菜が気になる



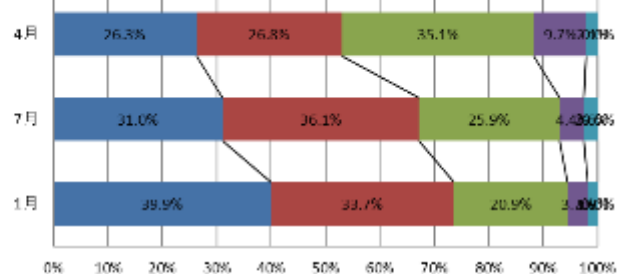
	1月	7月	4月
■ そう思う	16.7%	13.1%	10.3%
■ どちらかと言うとそう思う	28.3%	22.3%	21.8%
■ どちらとも言えない	31.5%	36.7%	33.6%
■ どちらかと言うとそう思わない	18.1%	15.5%	21.5%
■ そう思わない	5.4%	12.4%	12.7%
■ 誤記入・未記入	0.0%	0.0%	0.0%

### 27. 1日3回食事をする



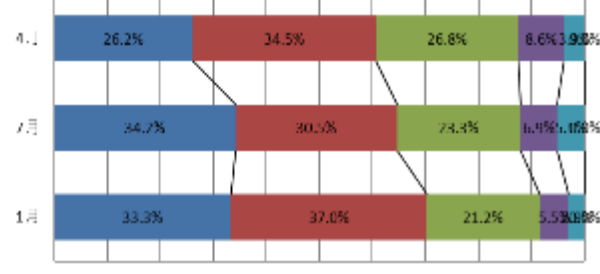
	1月	7月	4月
■ そう思う	49.5%	53.9%	53.7%
■ どちらかと言うとそう思う	22.7%	16.5%	19.2%
■ どちらとも言えない	12.6%	14.1%	13.3%
■ どちらかと言うとそう思わない	9.7%	9.5%	9.7%
■ そう思わない	5.4%	6.0%	4.1%
■ 誤記入・未記入	0.0%	0.0%	0.0%

36.自分の生活は地球温暖化と関係がある



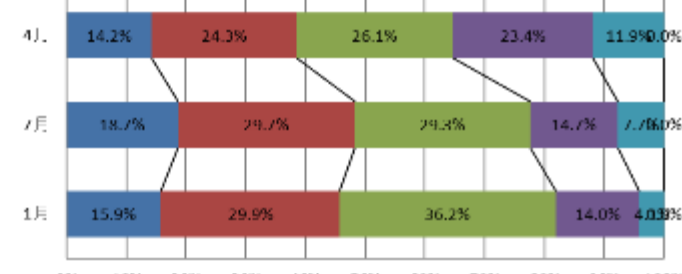
	1月	7月	4月
■ そう思う	39.9%	31.0%	26.3%
■ どちらかと言うとそう思う	33.7%	36.1%	26.8%
■ どちらとも言えない	20.9%	25.9%	35.1%
■ どちらかと言うとそう思わない	3.0%	4.4%	9.7%
■ そう思わない	1.8%	2.6%	2.1%
■ 試記入・未記入	0.0%	0.0%	0.0%

37.自分が食べているものと健康との関係が気になる



	1月	7月	4月
■ そう思う	33.3%	34.2%	26.2%
■ どちらかと言うとそう思う	37.0%	30.5%	34.5%
■ どちらとも言えない	21.2%	23.3%	26.8%
■ どちらかと言うとそう思わない	5.5%	6.9%	8.6%
■ そう思わない	2.0%	5.1%	3.9%
■ 試記入・未記入	0.0%	0.0%	0.0%

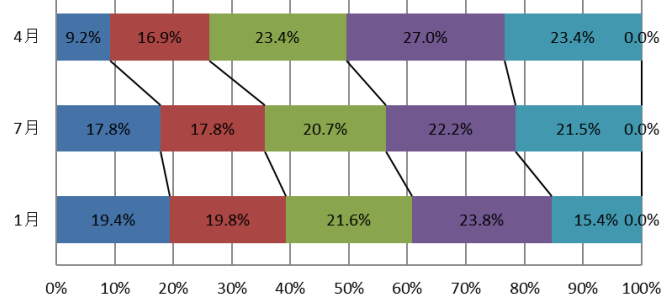
39.食べ物の産地が気になる



	1月	7月	4月
■ そう思う	15.9%	18.7%	14.2%
■ どちらかと言うとそう思う	29.9%	29.7%	24.3%
■ どちらとも言えない	36.2%	29.3%	26.1%
■ どちらかと言うとそう思わない	14.0%	14.7%	23.4%
■ そう思わない	4.1%	7.7%	11.9%
■ 試記入・未記入	0.0%	0.0%	0.0%

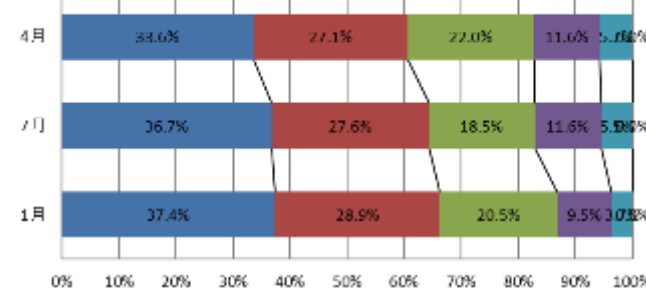
**考察② 徐々に環境問題、食べ物、農業への関心が向上している。**  
**園芸好きな人が多数派ではない**  
**⇒ 必修授業であるから体験できた**

46.よく自分で料理をするほうだ



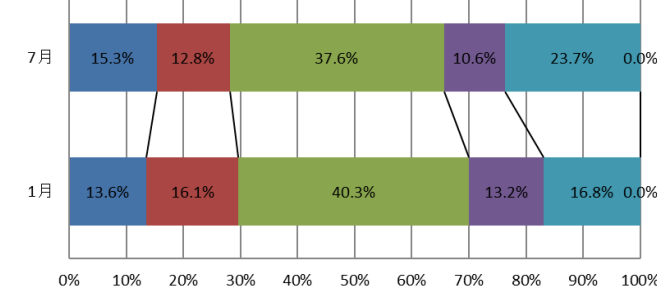
	1月	7月	4月
■ そう思う	19.4%	17.8%	9.2%
■ どちらかと言うとそう思う	19.8%	17.8%	16.9%
■ どちらとも言えない	21.6%	20.7%	23.4%
■ どちらかと言うとそう思わない	23.8%	22.2%	27.0%
■ そう思わない	15.4%	21.5%	23.4%

48.野菜をよく食べる方だ



	1月	7月	4月
■ そう思う	37.4%	36.7%	34.6%
■ どちらかと言うとそう思う	28.9%	27.6%	27.1%
■ どちらとも言えない	20.5%	18.5%	22.0%
■ どちらかと言うとそう思わない	9.5%	11.6%	11.6%
■ そう思わない	3.7%	5.5%	5.7%

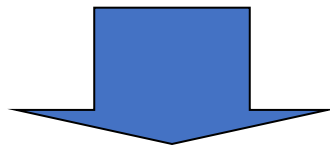
52.選択の「生活園芸Ⅱ」も履修してみたい



	1月	7月
■ そう思う	13.6%	15.3%
■ どちらかと言うとそう思う	16.1%	12.8%
■ どちらとも言えない	40.3%	37.6%
■ どちらかと言うとそう思わない	13.2%	10.6%
■ そう思わない	16.8%	23.7%

## 事例2 都心の子育て支援センターでの実践

- ・ 2003年から
- ・ 子育てセンター「あい・ぽーと」(東京・南青山)で、
  - ・ 未就学児とその家族を対象に
  - ・ 「親子有機野菜づくり教室」を開催
- ・ 学生の学びの場「園芸と人間形成」としても活用



- ・ 「子育て支援における有機園芸の役割」
- ・ 「都市部にある有機菜園が環境に及ぼす影響」を検証

# キッズ交流ガーデン「親子有機野菜づくり教室」の概要

- 2003年4月～2019年1月まで開催
- 1年間に4コース開催
- ①じゃがいも ②さといも
- ③大根・白菜 ④ホウレンソウと冬野菜いろいろ
- 1コース 定員18組
- 対象者：港区在住・在勤の未就学児とその家族
- これまでにのべ60コース、1000組以上、2500人以上の大人と子どもが有機園芸を体験、体感
- 畑部分の総面積：62平米

# 「都市部で有機野菜を育てることの意義と可能性」

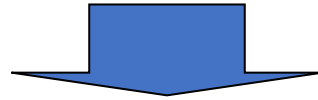
- ① 生態系の保全
  - ② 自然体験の場の提供
  - ③ 食育・食農教育の場
  - ④ 「人」と「人」をつなぐ、「コミュニティ形成の場」の提供
- 課題：場所と人材、資材



# 野菜の有機栽培体験がもたらす教育効果

①大学における「生活園芸Ⅰ」の実習

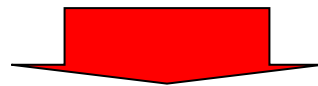
②子育て支援施設における親子有機野菜教室



・人間力の向上

・子育て・子育ち力の向上

・食育効果、有機農業への関心



「有機農業体験は人が生きていく上の基礎の学びの場」

食育・食農教育だけでなく**現代社会特有の問題解決の糸口**にも

## 2-5. 地域連携・問題解決のための有機農業

- 生活園芸から社会園芸へ - :

- ① 福島原発事故を機に、常設のオーガニックカフェを開設し、地元市民、福島の有機農業者、子どもたちとの交流開始、福島エコ&キッズキャンプ6回開催
- ② カリフォルニアFSに参加した学生からの発案ファーマーズ・マーケットを実施
- ③ 恵泉CSAのスタート
- ④ 都市部の集合住宅におけるコミュニティガーデン  
(@多摩ニュータウン)



# 2016～恵泉CSAをスタート 食べる人と作る人を直接つなぐ

## Keisen CSA

教育農場の野菜を通して、恵泉教育の原点に立ち返ってみませんか。

パートナー&サポーター  
募集

「ありふれたものの美しさを味わい、額に汗して自分の庭に花や野菜を作ることは、身も心も健康にするものである。こうしてわたしの頭の中には、普通のカリキュラムに、キリスト教と園芸及び国際というような新しい科目を加えた高等女学校の構想がだんだんと形を成してきた。」(河井道,1968)『私のランターン』



毎週木曜日

恵泉の野菜が届く\*

自由に  
畑の活動にも参加できる

天候に左右されることもありますが、精一杯、多くの種類を畑から直接お届けします。Keisen CSA 活動を共に育ててください。

Community Supported Agriculture  
地域を支える・地域が支える・つながる

Keisen CSA とは



都市化が進み、人と人の関係が疎遠になりつつある現在。有機園芸&有機農業を通して地域を支える、地域が支える、地域とつながることで、人と人の関係の紡ぎ直しができるのでは、という思いから始まりました。社会的弱者を含む多様な世代が集い、多様な生き物が使え、持続可能な社会・コミュニティー菜園を目指します。

栽培担当は、学生、教職員、有志等から成るチーム CSA。恵泉女学院大学の教育農場の一角で、必修科目生活園芸Ⅰと同じ有機・無農薬栽培で野菜、花、ハーブを育てます。



運営:教職員・学生有志からなるチームCSA  
単位を付与する体験学習の一環として参加することも可能



2022年12月インスタ投稿写真





# 庭から育む食と地域

## オーガニック・エディブル・コミュニティガーデン多摩の実践

恵泉女学園大学から徒歩10分、豊ヶ丘商店街の一角で、2021年春からレイズドベッドなどの設置に着手し、10月からは1か月に1回程度地域の皆さんと共に活動しています。



**ソーラーパネル:**  
発電した電気は蓄電池へ。  
災害時にも活用できる。



**雨水タンク:**  
雨水を貯めて、植物に水やりしたり、農具を洗う。



**「循環が見える」しくみ:**  
竹チップコンポスト、落ち葉たい肥づくりを実践。



**恵泉竹チップ段ボールコンポスト:**  
地元産の竹を用いて開発。家庭から出る生ごみをたい肥化し、有効活用することで、炭素貯留を促し、二酸化炭素の排出を削減。



**オーガニック・エディブルガーデン:**  
食育だけでなく、環境教育、大切な情操教育の場となる。



**レイズドベッド:**子どもからお年寄り、また、車いすや立ったままでも園芸を楽しむことができる。



**みんなで創り上げるガーデン:**  
花壇の手入れをしてきた草花は、花束にして参加者が持ち帰り、暮らしに彩を添える。





**ソーラーパネル:**  
発電した電気は蓄電池へ。  
災害時にも活用できる。



**雨水タンク:**  
雨水を貯めて、植物に水  
やりしたり、農具を洗う。



**「循環が見える」しくみ:**  
竹チップコンポスト、落ち葉  
たい肥づくりを実践。



**恵泉竹チップ段ボールコンポスト:**  
地元産の竹を用いて開発。家庭から  
出る生ごみをたい肥化し、有効活用  
することで、炭素貯留を促し、二酸化  
炭素の排出を削減。

## 地域におけるいのちとものの循環

- ・太陽光発電: 環境負荷を軽減し、緊急時の充電ステーション機能も。
- ・雨水利用: 自然界の水の循環の見える化、水の有効利用を促す。
- ・コンポスト: ガーデンや周辺から出る落ち葉などの有機物の利活用、循環の見える化。
- ・地域資源の有効活用: 身近で入手可能な有機質資材で健全な土づくり。
- ・オーガニックガーデン: 都市空間に多様な生き物が棲む環境を創造、ビオトープ機能も兼ねる。





## 人と自然、人と人をつなぐ

- ・有機栽培の実践:身近なところで食べものを育て、その本来の姿に触れる。
- ・草花やハーブ類、野菜、小果樹などを多様な作物を植栽:五感を用いて植物を楽しむ。
- ・収穫物を用いたイベント:食を通じて、地域の住民同士、世代を超えた交流を図る。
- ・園芸を身近に楽しむ工夫:レイズドベッドを設置するなど、だれもが楽しめるガーデン。
- ・コミュニティガーデン:地域住民との協働、みんなで創り上げる「みんなのガーデン」。
- ・ファーマーズデーの開催:定期的に活動することで、ガーデンへの愛着や地域への帰属意識が高まる。



**オーガニック・エディブルガーデン:**  
食育だけでなく、環境教育、大切な情操教育の場となる。



**レイズドベッド:**子どもからお年寄り、また、車いすや立ったままでも園芸を楽しむことができる。



**みんなで創り上げるガーデン:**  
花壇の手入れをしてきた草花は、花束にして参加者が持ち帰り、暮らしに彩を添える。

## 2-6 新しい時代のリーダー養成のための教育プログラム

韓国 梨花女子大における「分かち合いのリーダーシップ教育」



東アジアの**新しいリーダー養成カリキュラム**への導入

- 2019年夏：梨花女子大訪日プログラム@恵泉
- 2020年冬：合同プログラム@梨花女子大
- Key: **有機農業実習で「多様性」「循環」「共生」を体感する**
- 「梨花女子大で特別教養教育「分かち合いコミュニティガーデニング」が話題に」（「梨花女子大学学内ブログ」2020年11月26日）

2019年5月梨花女子大

# まとめ1：有機給食の教育効果をより高めるために

- ◆子どもたちに、安全・安心な有機食材による学校給食を提供するとともに**食べ物**が**何処でどのように作られているか伝える教育を**
- ◆どんなに小さなところでも、**身近なところに有機菜園をつくって、身近なところで命を育む姿を見せることが重要**
- ◆ 私たちは命をいただいて生きていることを体感できる教育を！
  - ⇒・学校給食に有機食材を
    - ・全ての児童・生徒・学生・国民に「種子ら育てて食べる経験を」
    - ・子どもに伝えるためには大人(教職員や親)の理解が不可欠



## まとめ2: 有機菜園の社会的意義と可能性

- 人を育てる、人と人をつなげる
- 地域課題の解決
- 持続可能な社会の在り方について考えるための礎（SDGsの礎）
- 「有機農業には暮らしを豊かにするだけでなく、人と人との関係、人と自然との関係を見つめなおし、コミュニティを再構築していく力、平和を導く力が備わっていると、信じています。世界平和の基本は、違いを認めあい、異なる者が共存する社会づくりではないでしょうか」 澤登(2005)

### **3 環境創造・環境再生農業としての有機農業**



## 3-1 「農に対する基本的な考え方」:(農に対する哲学)

- ① 「土は母なり」
- ② 「品種に勝る技術なし」
- ③ 「持続可能な農業を維持することが  
人の命を守ることなり」
- ④ 「農業は生命産業」

(有機果樹栽培先駆者からの教え)

## 3-2 「生命産業としての農業＝有機農業」を広げていくために

### ① 持続可能な農業経営体としての自立

- 労働力の効率的な配分
- 生産者と消費者、それを繋げる流通業者との連携「生・消・流連携」の推進
- 生鮮果実と加工品（ワイン・ジュース・ジャム）の組み合わせによるロスの削減、販売時期の拡大

### ② 地域において、社会運動として有機農業運動を推進する努力

### ③ 農を基盤とした、農を大切にす社会の再生

（栽培技術だけでは、有機農業が持つ公益性が生かされない。理念（哲学）を持つことが必要）

### ④ 農にまつわる伝統文化・農村景観の維持・継承

# ◆有機農業を広げるための取り組み

点から面への広がりを確実なものに(親⇒子)

- 1970年代前半 日本有機農業研究会入会
- 1994年 牧丘町有機農業研究会設立
- 1997年 やまなし有機農業市民の会設立
- 2007年11月 有機ネットやまなし設立
- 2008年6月 やまなし有機農業連絡会議設立: 全県域での有機農業推進





# 有機農業を介したつながり・関わりを大切にした活動



果樹園の生きもの調査



地域の棚田復活(古代米栽培)



現地視察会



援農受け入れ、消費者との交流

## 3-2. 果樹の有機栽培成功のポイント

- 基本技術は共通
- (1) 基本は**土づくり**; 健全な樹を育てる、雑草活用
- (2) 有機栽培に適した**品種**、  
有機栽培が可能な品種の選定と組み合わせ
- (3) 植物の生理・生態、園地の条件を知る、  
「樹と会話できるようになる」(**観察**)
- (4) 適正な園地の選定



- (5) 有機栽培向けの開園準備と適切な初期生育の確保：  
「果樹にも当てはまる**苗半作**」
  - ・徒長させない(苗の経歴性)
  - ・土壌微生物が豊富な環境での育苗(共生微生物)
- (6) 健全な樹の成長を確保するために、状況によっては病害虫対策のために有機JAS許容農薬の利用も考慮する
- (7) 品質基準と販売方法の転換、生食用と加工の組み合わせで販売先と販売期間の長期化を確保

### 3-3 土づくりの基本的な考え方

- 土づくり=土を育てる、育土（生きている土）
- 不耕起栽培：
- 雑草草生栽培：雑草防除ではなく、雑草管理・雑草活用
- 雑草を味方につけた園地管理、
  
- 有機質の内部循環促進による腐植等の供給
- 雑草活用による自然エネルギーの効率的な利用による省力化技術
- ◎低栄養、低窒素栽培×家畜糞主原料の堆肥

**優良園地の共通点：高腐植含量、高生物活性**

## 冬季：隣地の慣行栽培園との比較





## 3-4. 病害虫管理

目標：病気や虫をゼロにするのではなく、  
病害虫による果実品質への悪影響を最低限にする。  
病気が広がらない、果実に影響を及ぼさない。  
多様な生き物が共存できる環境の創造。

- ・適正な栽培環境の確保、不適切な環境の改善  
（風通し、陽当たり、排水等）
- ・適正品種の選択

# 「サイドレスハウス」= 原生地に 近い環境の創出







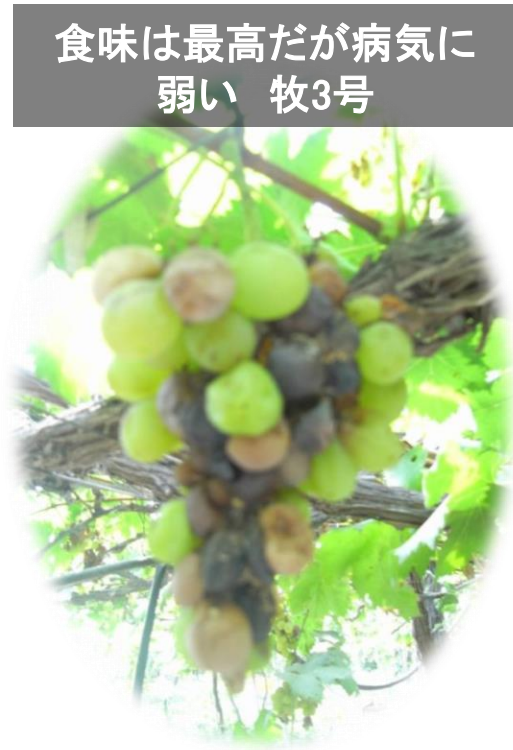
牧8号



国立シードレス  
生まれつきの種ナシ



サフォークレッド



食味は最高だが病気に  
弱い 牧3号

**多様な品種**

同じ栽培条件でも病気になる品種とならない品種がある



ワインランド:加工・生食兼用



ブラックオリンピア



オリンピア



ピアレス



小公子と  
注目の日本ワイン





## 3-5. 消費者とつながる

- 農の現場を知らない人の増加
- ⇒栽培過程を伝える必要性
- ⇒園地をみてもらう
- ⇒本当の姿を見てもらう（事実を知ってもらう）
- 有機栽培だから……ではなく、
- ⇒「おいしいね。」が基本
- 適正に評価してもらうためのコミュニケーション

## 2-5 農業生物多様性の創出と小さな自給農業の実践

- 畑の生き物調査の普及
- 自家用果樹園(立ち木)と自家菜園
- 地域の有機野菜生産者との連携支援
- 地域の中学生との大豆栽培
- 都市住民との交流事業

小さくても、循環の環が見える有機農業の成功事例を積み重ねることの重要性

# 3. まとめ



- **有機農業を育てていくためには、何をすればよいのか。**
- **有機農業の理解者を増やしていくためには、何が必要なのか。**
- **なぜ、有機農業を育てていく必要があるのか。**